

私を作った本

大切な本、忘れられない本との出会いをつづるコラム。今号は7月に東京本社にオープンした「銀座堂書店」を運営する、東京セントラル新聞販売株式・取締役の庭崎雅彦さんです。新聞販売所と書店というふたつの事業を営むにあたって役に立った思い出の3冊とは…

地域に愛される店づくりで活字文化を支える

東京セントラル新聞販売株式会社・

銀座堂書店 取締役

庭崎 雅彦さん

にわさき・まさひこ

1971年 東京都中央区生まれ。祖父の代から朝日新聞販売店、ASA築地、朝日新聞銀座シティ販売を経て2019年7月より東京セントラル新聞販売株式に所属。

銀座堂書店 books@ginzadou.com

Twitter @ginzadou_news



学生時代からこの築地で新聞配達を続け、現在は活字文化の配達を担う東京セントラル新聞販売株式の取締役に務めさせていただいています。祖父の代より地域密着で配達を続け、現在は地域貢献・配達網の維持を念頭に中央区・港区・渋谷区を区域に挑戦をさせていただいております。書籍事業も最初は、高齢で書店に行けないお客様の御用聞きから始まりました。顧客であった近藤書店さんへ交差し、本を卸させていただく小さくスタートした事業が地域や上司の理解と従業員の尽力のおかげで10年を経て、東京本社内に出版することができました。デジタ



売上の8割を占める優良顧客を逃さない方法

ダイヤモンド社 大坂祐希枝

ルが主流になった今、私たち販売所や書店にとっては苦しい時代になっています。販売環境が急速に変化していく中で、手に取ってもらう新聞や書籍がお客様の知の財産になるための販売手法・アプローチを日々模索しています。そんな中で参考になった本、やる気にさせてくれた本など3冊をご紹介します。

『売上の8割を占める 優良顧客を逃さない方法』（大坂祐希枝著・ダイヤモンド社）は、WOWOWで解約増加を食い止めるに新設された「解約防止部」の初代部長に任命された著者が実施した内容をまとめた1冊です。同じサブスクリプションモデルである我々にも共通することが多く、販売所としてできることを考えさせてくれる1冊です。市場が拡大しないなら、優良顧客の割合を高める作業に目を向ける。お客様ごとに購読理由は違います。しっかりとお客様のことを理解し優良顧客に近づけてもらう。私たちの仕事は、すべてのやり取りがAIで完結できるものではありません。人が介在し、コミュニケーションを取ることで理解し合える。販売所のほとんどは、その土地で何十年も経営しています。従来の手法に加え、今の時代に必要な顧客目線とは何かを追求して地域の方々から安心と信頼を得られるよう頑張っていました。

新聞販売所から書店も併設、担当エリアの拡大など仕事の環境も変わり、契約や商談など交渉する機会も格段に増えてきました。

『交渉力』（橋下徹著・PHP新書）は交渉を難しく考えるのではなく、話をまとめる力だと助言しています。弁護士時代の交渉から政治判断まで、交渉の連続でなおかつ時間をかけない交渉術のヒントが詰まっています。お客様・取引先・社内などすべてが交渉により成り立っています。円滑にま

めるためには事前準備を怠らないことの大切さや、優先順位の整理を挙げています。お客様でも社内でも意見をよく聞き、共感を得られるよう相手の価値観を理解することの必要性など、読んでみるとその通りだよなと思いたおせる、とても勉強になる1冊です。



交渉力 PHP新書 橋下徹



剣豪将軍 義輝 徳間文庫 宮本昌孝

東京本社 銀座堂書店にて「私を作った本」フェア開催中！本連載にて紹介した書籍を購入できます。03-3543-2428（平日10時～19時）

銀座堂書店は、朝日新聞社にある書店として、社内各部署のお客様に立って店づくり、一般のお客様からは、さすが新聞社の本屋さんと言ってもらえる店づくりをしています。お客様の声を聞き、時にはご相談もさせていただきながら、常に挑戦する気持ちを忘れず頑張っていますのでぜひ、お店に遊びに来てください。お待ちしております。

最後の1冊は、『剣豪将軍 義輝』（宮本昌孝著 徳間文庫）。忙しい時や、考えが行き詰まっている時などに不思議と読み返してしまふ小説です。上中下巻と長く、しかも続編まであり長いのですが一気読みしてしまいます。第13代将軍、足利義輝の人生を描いた伝奇小説ですが、通説とは違い、道三や信長などとの出会いながら、將軍として現実を受け入れ、苦しみもがきながら成長していく姿に引き込まれます。読み終えた後に、よし！明日からも頑張ろう！と思える1冊です。

収められているのもポイント高しです。ミステリー好きには書評家・小森収さんによる『短編ミステリーの二百年』（創元推理文庫、全6巻＝刊行中）をどうぞ。3世紀にわたる海外ミステリーの名品を厳選し、新訳で収めた壮大な企画です。モーム、フォークナーらミステリー作家とみなされていない大物も並んでおり、編者の創意と工夫が光ります。

名アンソロジーは意外な作品との出会いがあるのはもちろん、編者の解説も読みどころで、さながら丹念に構築された箱庭を愛でる趣があります。隙間時間はスマホが定番の昨今ですが、せっかくの読書の秋、カバンに1冊のアンソロジーをのばせてみてはいかがでしょうか。

野波健祐（のなみ・けんすけ）

本の情報サイト「好書好日」編集長。91年入社。94年から、東京・学芸部（現・文化くらし報道部）でカルチャーもろもろ担当。18年6月から現職。

https://book.asahi.com/



好書好日

Good Life with Books

アンソロジーが好きです。「好書好日」でホラ一分野の時評を書いている怪奇幻想ライター・朝宮運河さんが初めて編集した「家が呼ぶ 物件ホラー傑作選」（ちくま文庫）を読み、改めて思いました。小松左京「くだんのはは」、日影丈吉「ひこばえ」といった比較的知られた名作からマニアックな珍品まで、「恐の家」の話が並びます。この夏のヒット映画「事故物件 怖い間取り」など、近年の実話怪談ブームも追い風となったのか、好調に売れているようです。

同じくちくま文庫で5月から順次刊行されている『現代マンガ選集』（全8巻）は中条省平さん、恩田陸さんといったマンガの読み巧者が、テーマごとに作品をセレクト、この半世紀のマンガの流れを改めて「発見」しようと試みる好企画。作品の知名度よりも、マンガ表現としての革新性に着目しており、石ノ森章太郎ら大家の意外な作品が